

2015 年 6 月 16 日

高麗文康氏（高麗神社宮司）

埼玉県日高市

筆者の住む埼玉県日高市は人口約 5 万 7 千人。自然が豊かで人心の穏やかな土地柄である。東京から 1 時間余りで里山の雰囲気を楽しむことができる行楽地として知られており、「巾着田曼珠沙華公園」に 500 万本の曼珠沙華が咲き「曼珠沙華まつり」が開かれる 9 月下旬はひととき多くの人々が押し寄せている。

ところで日高市を訪れた人々が脳裏に焼き付けて帰るのは「高麗^{こま}の里」という通称である。実際、市内の駅名には「高麗駅」「高麗川駅」、市内を流れる清流「高麗川」、寺社に「高麗山聖天院勝楽寺」や「高麗神社」〈資料Ⅰ・写真〉があり、隣街に向かう峠道は「高麗峠」と呼ばれている。市所有の有形登録文化財「高麗郷古民家」など公共施設にも「高麗」が溢れる。それが埼玉県日高市の特徴である。



資料Ⅰ：高麗神社社殿

高麗郡建郡

『続日本紀^{しよくにほんぎ}』第 7 卷には〈資料Ⅱ〉のような記述が見える。霊亀 2 年（716）5 月武蔵国に東国 7 国の高麗人 1799 人が遷され高麗郡が置かれた、というこの記事こそ日高市に「高麗」の名が根付くきっかけを作ったのだ。

続日本紀 卷第七 靈龜二年五月辛卯
以駿河甲斐相模上総下総常陸下野
七国高麗人千七百九十九人遷于武蔵国
置高麗郡焉

資料Ⅱ：『続日本紀』高麗郡建郡記事

それでは、ここで言う高麗とは何なのだろうか。

『日本書紀』欽明天皇 31 年 (570) 4 月に「高麗使人、辛苦風浪、迷失浦津。任 水漂流、忽至着岸。」と高麗からの使節が来日 (倭) したことを伝えている。この使いは海路に迷い漂流した挙句、上陸した場所の郡司の姦計により、郡司を天皇と思い込まされてしまう。越の国の住人江沼臣^{えぬのおみもしろ}裾代の通報により天皇の知るところとなり、遣使一行は山城国の相楽館^{さがらのむろずみ}に遷され、紆余曲折の末、遣使の使命を果たした。570 年に日本との国交を開いた「高麗」は現在「高句麗」として知られている。高句麗は東北アジアの大国として成長した 400 年代に「高麗」を称するようになった。それ故に『日本書紀』を始めとする日本の史書は「高句麗」をとらず「高麗」と記している。故に高麗郡の「高麗」は高句麗に由来するのである。

高句麗

高麗郡の淵源である高句麗はどんな国であったのだろうか。

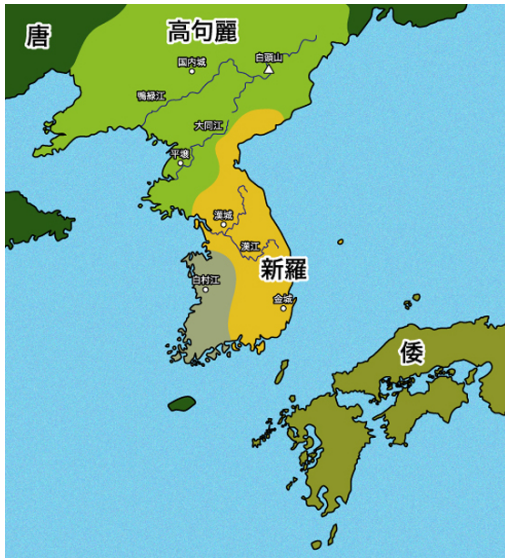
高句麗は紀元前 37 年の建国とされ 668 年に滅亡した。始めは現在の中国吉林省に起こり周辺に領域を広げた。5 世紀には、中国東北部および朝鮮半島中部以北にわたる広い地域を勢力下に置き最盛期を迎えた。代表的な遺跡は首都が置かれた中国吉林省集安市と北朝鮮の平壤市に多く、これらはユネスコの世界遺産に指定されている。

高句麗文化で著名なものは、古墳壁画、山城、石碑などである。古墳壁画に描かれたさまざまな図柄から高句麗人の生活の有様と精神世界を垣間見ることができる。山城は有事の際の防御に優れた力を発揮した。石碑には「広開土王碑」(中国吉林省集安市)「忠州高句麗碑」(韓国忠清北道忠州市・〈資料Ⅲ・写真〉) などがあり、それぞれ古代東北アジア史を考えるうえで一級の史料である。

高句麗は末期に唐と敵対し、唐・新羅連合軍によって 668 年に滅亡した。



資料Ⅲ：忠州高句麗碑（韓国忠清北道忠州市）



高句麗末期

日本にきた高麗人の行方

666年長年にわたる唐との抗争に加え、内部分裂も表面化した高句麗は滅亡の危機を迎えていた。10月、この年2度目の使節が高句麗から日本へ派遣された。日本に高句麗の危急を伝え救援を求めたであろうこの使節団に「玄武若光」がいた〈資料Ⅳ〉。この人物こそ、後に大和朝廷から「従五位下」の位と「王」の姓を賜り、高麗郡初代郡長となる高麗王若光であろう。若光らを始め前後して派遣された使節団は高句麗存続のため必死の努力をしたのであろうが、668年高句麗は滅亡した。

日本書紀 卷第二十七 天智天皇五年十月
甲午朔己未 高麗遣臣乙相奄那等進調
大使臣乙相奄那副使達相道二位玄武若光等

資料Ⅳ：『日本書紀』高句麗使節来日記事

高句麗滅亡後、朝鮮半島の権益をめぐり同盟関係にあった唐・新羅が対立し、670年代までその抗争が続く。ようやく半島の動乱が沈静化した685年大和朝廷は、日本にいる渡来人に爵位を与えた。同時に渡来人の東国遷住を進めており高麗人たちもこうした流れの中で東国に遷り住むようになったのであろう。

大宝3年(703)若光に「王」の姓が与えられた。この時13年後の高麗郡建郡はすでに計画されていたのではないだろうか。1800人近い人々の移動には長い準備の期間が必要である。さらに高麗郡が置かれた地域は当時入間郡内の閑地である。高麗郡建郡に至る道程には大和朝廷、高麗人の有力者、武蔵国の有力者の介入と結束があったはずだ。高麗人の行方には多くの関心が寄せられていたのだ。



高麗郡末期

高麗郡建郡 1300 年を迎えるにあたって

平成 8 年 10 月 19 日、高麗郡初代郡長高麗王若光を祭神とする高麗神社の例祭直会の席上、宮司式辞に立った高麗澄雄（当時）は「20 年後に迎える高麗郡建郡 1300 年は地域を挙げて盛大にお祝いをしたい」と述べた。高麗郡建郡 1300 年への初めての言及であった。当時傍らで式辞を聞いた筆者は先代澄雄の言葉の真意を十分に理解しないまま時間を費やしたが、廃止から 100 年を経て人々の記憶から消えかかっていた高麗郡の認知度を上げようと、平成 14 年に「高麗郡建郡 1300 年記念事業」を開始した。約 10 年の活動が実り、平成 23 年に民間の任意団体「高麗郡建郡 1300 年記念事業委員会」が発足した。同会は平成 27 年 4 月に「一般社団法人高麗 1300」となり、明年の当該年を盛り上げるため準備を進めつつ、「1300 年」以降も継続する息の長い活動を模索している。

日高市役所にも市長を委員長とする「高麗郡建郡 1300 年日高市実行委員会」が組織されたことで行政と民間が一体となった取り組みが期待されている。

終わりに

今から 1300 年前、大和朝廷は武蔵国に高麗郡を置いた。国を失い、波濤を越え、苦難の末に日本に定着した高麗人にとって、祖国名を冠する郡の設置は、感慨深いものであっただろう。数多くの渡来人が日本に定着したものの、その多くは足跡すらうかがい知ることができない。それに比して当地に高麗人の足跡が残るのは、明治 29 年（1896）までの 1180 年間にわたり高麗郡が存続したからである。高麗神社に伝わる『武蔵国高麗氏系図』には「高麗姓の事、郡名にして軽ろからず」の一文が見える。長い歳月を経て尚、人々が高麗郡に深い思いを寄せていた証左であろう。高麗郡建郡 1300 年を迎えるにあたって、そんな現代の「高麗人」が育つことを願ってやまない。

（了）